【特別調査報告】盛岡本誓寺史料〔一〕法宝物編

緒言

石森山本誓寺は、岩手県盛岡市に所在する真宗大谷派寺院である。開基は親鸞二十四輩の第十番是信房を開基と伝える。

是信房は、同寺由緒等によれば、本名を吉田信明という京都の公家であったが、仏縁があって越後・関東の親鸞を訪ね、その弟子となった。その後、寛喜三（一二三一）年に親鸞の求めに応じて布教のために奥州和賀郡に下向し、最初は同郡一柏（花巻市）に居住、後に紫波郡彦部（紫波郡紫波町）の石ヶ森に移り本誓寺を建立した。文永三（一二六六）年に往生したという。

本誓寺はまた伝えによれば、天正十二（一五八四）年に近くの二日町（紫波郡紫波町）に移転した後、寛永十二（一六三五）年に盛岡城下町へと移転したという（現在地）。江戸時代には末寺三十か寺以上を有する東北地域最大級の真宗寺院であり、貴重な初期真宗法宝物を所蔵していることでも知られている。特に光明本尊は模本や縮刷版本まで作成され、全国各地で出開帳が行われていた。

しかしながら、本誓寺の寺院としての歴史や所蔵されている法宝物・史料の全容については明らかになったことはこれまでなかった。大正七（一九一八）年に山田文昭の調査一行が祖跡探訪の過程で同寺を訪れ、光明本尊をはじめ十八点の法宝物を見出し、後に紹介しているが、それも全容解明には至っていない。『真宗重宝聚英』（一九八七～九年）においても、光明本尊をはじめ四点が掲載されているのみである。また、由緒書等を含む古文書類についても、調査報告は管見の限り皆無である。山田文昭の調査から約一〇〇年、真宗史研究において熱望されながら、果たされてこなかったのが盛岡本誓寺所蔵史料調査であった。

それが、このたび、本誓寺住職の吉田信氏よりご許可をいただき、同朋大学仏教文化研究所が調査に伺わせていただくことになった。お取り次ぎをいただいたのはこれまた親鸞二十四輩（第十二番）の水戸善重寺住職藤本貫大氏である。記して御礼申しあげる。

調査の展開としては、まず所長の安藤が二〇一八年十二月二十七日にご挨拶訪問と予備調査を行なった。この時点で、法宝物のみならず古文書類も良好な保存状態で数多く現存していることが判明した。その後、左記の日程・人員で調査を重ねた。

〔第一次調査〕二〇一九年三月十日（日）～十一日（月）
蒲池・青木・藤井・千枝・中川・日比野・安藤他一名

〔第二次調査〕二〇一九年八月二十日（火）～二十一日（水）
蒲池・青木・千枝・中川・川口・日比野・安藤

〔第三次調査〕二〇二〇年三月八日（日）～十日（火）
蒲池・青木・千枝・中川・川口・日比野・安藤

五〇〇点以上と推計される古文書類の整理把握には時間がかかり、調査は今後も継続するが、法宝物類についてはほぼ把握できた。そのため、ここで特別調査報告〔一〕を行なうことにしたい。

緒言の最後に、何よりも本誓寺住職吉田信氏はじめご家族関係者の皆様のご厚情に、重ねて甚深の謝意を表する次第である。

（文責　安藤　弥）

【史料目録・解説―法宝物編―】

1　光明本尊　一幅　絹本着色・掛軸装　【口絵1】

〔本紙〕縦一三七・五cm×横九八・五cm

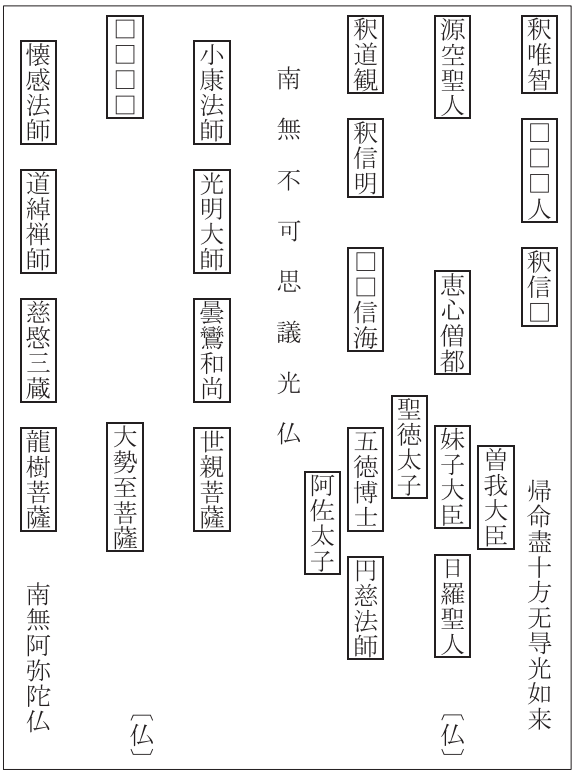
本紙中央に金泥籠文字の八字名号（南無不可思議光仏・光明二八本。「无」ではなく「無」を用いるのが特徴）、下部右に金泥籠文字の十字名号（帰命盡十方无导光如来・光明三三本）、下部左に金泥籠文字の六字名号（南無阿弥陀仏・光明は無し）を配置し、名号間に釈迦如来（右・光明二〇本）・阿弥陀如来（左・光明二八本）を描く（いずれも蓮台付）。

左上部に大勢至菩薩と天竺（インド）の龍樹・天親、震旦（中国）の慈愍・曇鸞・道綽・善導・懐感・法照・小康を描き、右上部に和朝（日本）の聖徳太子（孝養像）・六侍臣（妹子・曽我・日羅・恵慈・阿佐・学（覚）哿）と源信、そして法然を囲み、親鸞等六人を描く。六人は親鸞・信仏・信海・信明（是信（心）房＝本誓寺開基）・道観・唯智と推定される（以上、配置と札銘の判読については下図も参照）。聖徳太子の上半身が金色であること、親鸞等六人が淡い薄墨色（鈍色）の法衣を着ていること、親鸞が礼盤ではなく上畳に着座することなどが絵相の特徴として指摘できる。

南北朝時代の制作と推定される初期真宗の法宝物であり、状態は良好で（彩色も鮮やか）、全体としては制作当初のまま残されていると思われる。ただし、部分的には補彩もあるように見られる（金部分など）。また、本紙右側の札銘がやや切れているため、表装をし直した際に少し切断されたとみられる。上下に讃文が付されていたかどうかはわからない。

この盛岡本誓寺本は、江戸時代に模本が作成され、何度も各地で出開

〔配置模式図（札銘判読）〕



帳されたことで知られる。模本も現存するが、札銘には原本から少し変更された箇所がいくつかある。読み縁起も多く制作され、現存している。

＊札銘は絹本の地（茶色）に金縁で囲み、金字で記されたようで、当初のものと思われる（後世補筆を思わせる不自然さはない）。

＊現状では配置模式図のように読める。唯智の下は明らかに親鸞の像容で、札銘は最後の「人」の右払いのみが見出せる。その下は通例なら聖覚法印が描かれる場所で、その聖覚の像容の特徴は見えているが、「信仏」となっている（真仏としたかったか）。その左側は通例なら信空であり、これも信空の像容の特徴が見えているが、「信海」となっている（鹿島の信海との関係を強調する意図があったか）。聖徳太子の六待臣のうち、博士学哿を「五徳博士」、恵慈を「円慈法師」とすることも特色である。

＊模本では、次のような変更・補筆がある。

「釈唯智」→「釈聖覚」「□□□人」→「釈親鸞」「釈信□」→「釈真仏」「源空聖人」→「源空上人」「恵心僧都」→「源信和尚」「釈道観」→「釈性信」「釈信明」→「釈是心」「□□信海」→「沙弥信海」「日羅聖人」→「日羅上人」「円慈法師」→「恵慈法師」「小康法師」→「少康法師」「□□□□」→「法照禅師」「懐感法師」→「懐感禅師」「光明大師」→「善導大師」「世親菩薩」→「龍樹菩薩」「龍樹菩薩」→「天親菩薩」

＊山田文昭は、模本を参照しつつ、札銘を次のように読んでいる（ここでは親鸞ら六人のみを記す）。

「釈唯□」「釈親鸞」「釈真仏」

「釈性願」「釈信明」「沙弥信海」

＊『真宗重宝聚英』第二巻は、札銘を次のように読んでいる（同）。

「□唯智」「親鸞□□」「□」

「釈唯□」「□聞照」「□信海」

〔参考〕山田文昭『真宗史之研究』（破塵閣書房、一九三四年）第三編「解題並史料　二、祖蹟採訪史料／四、光明本尊調査」二七六～二八〇頁・三四三頁（大正七（一九一八）年の調査記録）、日下無倫『真宗史の研究』（平楽寺書店、一九三二年）五三～五四頁、『真宗重宝聚英』第二巻（同朋舎出版、一九八七年）三二～三五頁。

2　光明十字名号并三菩薩連坐像　一幅　絹本着色・掛軸装　【口絵2】

〔本紙〕縦九五・一cm×横三二・三cm

中央に金泥籠文字で「盡十方无导光如来」（蓮台付）とあり、その下に三菩薩を描く。上部欠損（「盡」の途中から見える）のため、「帰命」があったかどうかは不明。「帰命」がなく同様に下部に三菩薩を描く事例は他にもある。また光明の本数などは不明である。三菩薩のうち、やや大きい中央の菩薩は合掌する大勢至、向かって左は如意を持つ龍樹、右は花茎を持つ天親（世親）と推定される。**1　光明本尊**（本誓寺蔵）

の天竺三菩薩とほぼ同じ像容とみられるからである。また、そこから、光明本尊の天竺三菩薩を引き写して名号の下に配置して制作した可能性も考えられる。室町時代に中央ではなく東北地域の地元において制作されたものであろうか。

〔参考〕『真宗重宝聚英』第一巻（同朋舎出版、一九八八年）五四～五五頁。

3　方便法身尊像幷僧尼夫妻連坐像（光明摂取本尊）

一幅　絹本着色・掛軸装　【口絵3】

〔本紙〕縦九七・一cm×横三五・七cm　〔仏身〕総高六〇・〇cm、光輪幅二一・二cm、肩幅一五・四cm、裾幅一七・八cm

四八本の光明を放つ真向きの阿弥陀如来が蓮台の上に立ち、その向かって左下に尼（女性出家者）像、右下に僧（男性出家者）像を同じ上畳（横長）に並んで着座する配置で描く一幅。光明は仏身を縦に貫く古態を示している。僧・尼両人とも黒衣・墨袈裟の法衣をまとい、赤玉の数珠を左手にかけて合掌するすがたで描かれ、尼のみ頭巾を着けている。「光明摂取本尊」と名付けられ、下方に描かれるこの僧・尼が阿弥陀如来の摂取不捨の光明に照らされて救われていることを視覚的に示して説いたものと考えられる。初期の真宗信仰の実態を考える上で、非常に貴重な絵画造形である。この僧・尼は夫妻とみられ、読み縁起においては「能信」（本誓寺第二世）とその妻「妙信」として物語られ、本願寺覚如が奥州に下向した際に対面して帰依し、この本尊を授けられたという。南北朝時代の制作と推定される。

＊『真宗重宝聚英』第三巻（同朋舎出版、一九八九年）二四・二七頁。

4　方便法身尊像幷金泥六字名号（名体不離本尊）

一幅　絹本着色・掛軸装　【口絵4】

〔本紙〕縦一〇二・八cm×横五〇・三cm　〔仏身〕総高七一・二cm、光輪幅二二・八cm、肩幅一八・〇cm、裾幅二〇・〇cm

二〇本の光明を放つ真向きの阿弥陀如来（袈裟田相部は卍つなぎ紋）が蓮台に立ち、その両側に一つずつ金泥六字名号「南無阿弥陀仏」（蓮台付）を配置する構図で描く一幅。「名体不離本尊」と名付けられ、読み縁起においては、阿弥陀如来の救いは名（号）をもって成就するがゆえに名号と絵像が離れず同一であることが説かれる。是信が親鸞より奥州教化を申し付けられた際に、本尊として授けられたとも物語られる。室町時代の制作と推定される。

＊『真宗重宝聚英』第三巻（同朋舎出版、一九八九年）六～七頁。

5　六字名号幷高僧連坐像　一幅　絹本着色・掛軸装　【口絵5】

〔本紙〕縦九四・四cm×横三五・六cm

中央に六字名号「□□阿弥陀仏」（蓮台付。上部欠失で「無」の一部が見える）、その左右に高僧を連坐で配置する。上部欠失のため、もと

もと何人描かれていたかは不明。現状では六人描かれていることは確認できる。ただし、左上の一人は上畳と法衣の裾がわずかに見えるのみである。右側の札銘は上から「□空□」「釈□□」「釈□□」、左側の札名は上から「釈楽空」「釈敬智」と判読できる。

6　十字名号（蓮如筆）　一幅　紙本着色・掛軸装　【口絵6】

〔本紙〕縦九五・六cm×横三八・三cm

紙本に墨書で楷書体の「帰命盡十方无导光如来」をしたため、蓮台（着色）を配置する一幅。『蓮如名号の研究』（法藏館、一九九八年）において「タイプあ」に分類される本願寺蓮如筆名号である。

7　六字名号（蓮如筆）　一幅　紙本墨書・掛軸装　【口絵7】

〔本紙〕縦八七・二cm×横三四・三cm

紙本に墨書で草書（行書）体の「南無阿弥陀仏」をしたためた一幅。『蓮如名号の研究』において「タイプA―2」に分類される本願寺蓮如筆名号である。

8　九字名号（証如筆）　一幅　紙本着色・掛軸装　【口絵8】

〔本紙〕縦九五・七cm×横三八・三cm

紙本に墨書で楷書体の「南無不可思議光如来」をしたため、蓮台（着色）を配置する一幅。筆跡の特徴としては蓮如でも実如でもないが、戦国時代のものとみられ、本願寺証如筆と推定される。

9　七高僧像（教如期）　一幅　絹本着色・掛軸装　【口絵9】

〔本紙〕縦一〇五・四cm×横四七・四cm

真宗寺院の内陣余間に聖徳太子影像と並べて奉掛される「三朝七高僧」連坐像。現状では裏書は貼付されていないが、後掲裏書3（慶長十五〈一六一〇〉年・本願寺教如）が該当する。

10　正信偈文（教如筆）　二幅　紙本墨書・掛軸装　【口絵10】

①〔本紙〕縦四九・八cm×横二一・五cm

「本願名号正定業至心信楽願為因
成等覚証大涅槃必至滅度願成就」

②〔本紙〕縦四九・六cm×横二一・四cm

「憶念弥陀仏本願自然即時入必定
唯能常称如来号応報大悲弘誓恩」

紙本に墨書で記され、筆跡から本願寺教如筆と判断できる双幅の正信偈文である。

11　十字名号（准如筆）　一幅　紙本着色・掛軸装　【口絵11】

〔本紙〕縦四一・八cm×横一五・九cm

紙本に墨書で楷書体の「帰命盡十方无碍光如来」をしたため、蓮台（着

色）を配置する一幅。向かって左下方に本願寺准如の花押がある。軸裏に「吉田寛栗」とあり、幕末・明治の本誓寺住職による収集品と推測される。

12　幼児名号（十字・六才）　一幅　紙本着色・掛軸装　【口絵12】

〔本紙〕縦四六・二cm×横一九・一cm

紙本に墨書で楷書体の「帰命盡十方无碍光如来」をしたため、蓮台（着色）を配置する一幅。名号の、向かって左下方（蓮台上部）に「六才」の墨書があり、いわゆる幼児名号である。

13　幼児名号（十字・十才）　一幅　紙本着色・掛軸装　【口絵13】

〔本紙〕縦九四・三cm×横三二・〇cm

紙本に墨書で楷書体の「帰命盡十方无碍光如来」をしたため、蓮台（着色）を配置する一幅。向かって左下方に「十才」の墨書があり、これもいわゆる幼児名号である。

14　是信房信明影像　一幅　絹本着色・掛軸装　【口絵14】

〔本紙〕縦九八・八cm×横四二・一cm

〔銘〕「是心房釈信明」

〔裏書〕（直書）「大谷本願寺釈彰如（朱印）

明治四十年八月二十九日

是心房影　陸中国岩手郡

米内村

本誓寺住物也　」

本誓寺開基の是信房信明（ただし、この一幅においては銘・裏書ともに「是心房」と表記される）の影像。裏書によれば、明治四十年（一九〇七）八月二十九日に東本願寺第二十三世彰如から本誓寺に授けられている。黒衣・墨袈裟をまとい上畳に着座するすがたで描かれている。上部に讃はない。本誓寺本堂の内陣余間に奉掛されている。

15　是信房信明影像（推定）　一幅　絹本着色・掛軸装　【口絵15】

〔本紙〕縦一一三・五cm×横五二・二cm

〔讃〕①（右）縦二二・五cm×横二〇・〇cm

「仏法力の不思議には／諸邪業繫さはらねば

弥陀の本弘誓願を／増上縁となづけたり」

（善導和讃第十首）

②（左）二二・五cm×横二〇・〇cm

「真宗念仏ききえつつ／一念無疑なるをこそ

希有最勝人とほめ／正念をうとはさだめたれ」

（善導和讃第十九首）

銘・裏書等がないため、像主名が確定できないが、14　是信房信明影像と比して面貌に一致点が多いため、これも本誓寺開基是信房信明の影像と推定される。八藤紋の黒衣と墨袈裟をまとい白い数珠を持つ立像である。附属する品や書付の内容から見て、近代以降の出開帳において用いられたものと推測される。

16　繍仏阿弥陀三尊来迎図　一幅　刺繍・掛軸装　【口絵16】

〔刺繍部〕八七・〇cm×横三五・八cm

刺繍で表現された阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の三尊来迎図。表装まわし部分まで刺繍となっている珍しい一幅。制作年代は不明であるが、古態を示している。桐箱入り（桐箱焼印「平野店」）で保管されている。これも出開帳に用いられたか。

17　来迎三尊仏　三幅　絹本着色・掛軸装　【口絵17】

①阿弥陀如来像　〔本紙〕縦八二・七cm×横三四・六cm

②観音菩薩像　〔本紙〕縦七八・九cm×横三四・七cm

③勢至菩薩像　〔本紙〕縦七九・四cm×横三四・七cm

阿弥陀・観音・勢至が一幅ずつ描かれ、セットになったもの。阿弥陀仏の頭上に梵字が示されており、非真宗系の一幅であるが、鎌倉時代の制作か。出開帳に用いられたものと推測される。

18　一枚起請文（伝源空筆）　一幅　紙本墨書・掛軸装　【口絵18】

〔本紙〕縦八二・〇cm×横三七・〇cm

法然房源空が往生する二日前に記した遺言「一枚起請文」の写し。末尾に「建暦元年正月廿三日　源空判」とある。軸裏に「寛栗」とあり、これも幕末・明治の本誓寺住職による入手品か。

19　一枚起請文（伝一遍筆）　一幅　紙本墨書・掛軸装　【口絵19】

〔本紙〕縦八〇・〇cm×横五三・七cm

法然の「一枚起請文」を一遍が書写したものと伝える。軸裏に「時宗開祖　明治四十四年五月七日帝国博物館ニ於而指定ス一遍上人ノ真蹟相違無事証明□□智真房筆　一遍上人筆正応二年八月十日入滅観無碍閣書院　見知恩院第四世道空房覚生ノ上足佐原学道房信順沙弥真筆　寛栗所蔵」とある。

20　天蓋光明六字名号幷三菩薩連坐像・十二光仏（六字名号）　一幅　紙本着色・掛軸装　【口絵20】

〔本紙〕縦一六二・〇×横九三・七

越中国（新潟県）の親鸞旧跡鳥屋野院浄光寺から、幕末・明治の本誓寺住職吉田寛栗が譲り受けたと伝える一幅。模写本の体裁である。軸裏に「十二光仏　祖師聖人真蹟写　本庄雪僊筆　越中国浄光寺譲品　寛栗所持」とある。

模本1　光明本尊模本　一幅　絹本着色・掛軸装　【口絵】

〔本紙〕縦一三八・九cm×横九七・〇cm

模本2　光明摂取本尊模本　一幅　絹本着色・掛軸装　【口絵】

〔本紙〕縦九一・八cm×横三六・二cm

模本3　名体不離本尊模本　一幅　絹本着色・掛軸装　【口絵】

〔本紙〕縦一〇三・一cm×横四九・五cm

三幅の模本については、いずれも出開帳用に制作されたものとみられる。ただし、制作時期と背景については、それぞれ異なる可能性があり、検討課題である。**模本3**については、大正十二（一九二三）年の『名体不離縁起』によれば、南部藩領主の願いにより、東本願寺第二十世達如の許可により作成されたという。

裏書1　親鸞影像裏書　一点　紙本墨書

〔本紙〕縦六五・四cm×横二九・一cm

大谷本願寺釈教如（花押）
文禄五丙申年七月十□（四カ）日
奥州北斯波郡松田庄
本願寺親鸞聖人御影
石森本誓寺常住物
願主釈賢勝

本願寺教如が文禄五（一五九六）年七月に本誓寺賢勝に授与した親鸞影像の裏書。表画は現存不明（江戸時代の火災で焼失か）。

裏書2　聖徳太子影像裏書　一点　紙本墨書

〔本紙〕縦六三・二cm×横二八・九cm

大谷本願寺釈教如（花押）
慶長拾五庚戌年十月［　］
奥州彦部郡紫波□
松田庄石森本誓寺常
住物也
願主釈賢勝
聖徳太子真影

本願寺教如が慶長十五（一六一〇）年十月に本誓寺賢勝に授与した聖徳太子影像の裏書。表画は現存不明（同右）。

裏書3　三朝高祖真影裏書　一点　紙本墨書

〔本紙〕縦六五・三cm×横二八・六cm

大谷本願寺釈教如（花押）
慶長拾五庚戌年十月十日
奥州彦部郡紫波郷
松田庄石森本誓寺常
住物也
願主釈賢勝
三朝高祖真影

本願寺教如が慶長十五（一六一〇）年十月十日に本誓寺賢勝に授与した七高僧連坐像の裏書。表画も現存（9　七高僧像）。

聖教1　唯信鈔文意　一冊　紙本墨書・冊子装　【口絵】

〔本紙〕縦二六・七cm×横一八・四cm　〔装丁〕竪帳（粘葉装）

〔丁数〕全五一丁（うち墨付四七丁）　〔内題〕「唯信抄文意」

〔奥書〕「[　　]

建長二歳庚戌十月十六日

愚禿親鸞七十八歳書之

藤原□（花押）」

親鸞の著作『唯信鈔文意』の古本。奥書（識語）によれば、建長二（一二五〇）年十月十六日に七十八歳の親鸞が書いたという。本誓寺の縁起によれば、これは親鸞の直筆で、是信房が五条西洞院の親鸞を訪ね、出羽・奥州の法義繁昌を詳しく物語したところ、親鸞が大いに喜び、染筆し、是信房に与えたものと伝える。先行研究においては現存最古の写本とされ、同年を著作年とする説がある。親鸞本人の筆に酷似しており、詳しい検討を要する。末尾の藤原某は所持者名か。半面五行。紙背および裏打紙の紙背に丁数等の墨書および黒印がある。

〔参考〕『増補親鸞聖人真蹟集成』第八巻（法藏館、二〇〇六年）三七三頁。

聖教2　御伝鈔上・下　二冊・冊子装　【口絵】

〔本紙〕縦二四・五cm×横一八・〇cm　〔装丁〕竪帳（粘葉装）

①上巻　〔内題〕「本願寺聖人親鸞伝絵上」　〔丁数〕二九丁

②下巻　〔内題〕「本願寺聖人親鸞伝絵下」　〔丁数〕二六丁

親鸞の一代記『御伝鈔』の写本（戦国時代か）。ヘラ界線と朱点がある。表紙・後表紙等は綺麗な装丁で付け直されている（外題「御伝鈔　上」「御伝鈔　下」）。

聖教3　御文　一冊・冊子装　【口絵】

〔本紙〕縦二五・八cm×横二〇・一cm　〔装丁〕竪帳（袋綴）

〔丁数〕四八丁　〔冒頭〕「抑当流門徒中ニヲイテコノ」

〔識語〕「証如（花押）」

本願寺証如判『御文』の写本。全十七通を収める。表紙・後表紙等は装丁し直されている（外題なし）。

聖教4　聖教断簡五行　一幅　紙本墨書・掛軸装

〔本紙〕縦二二・〇cm×横一五・〇cm

『安心決定鈔』の断簡（「味トイフサラニ機ノ三業ニハ」以下五行）を表装したもの。軸裏に「大師真蹟　安心決定ノ切鈔　室町時代」とある。出開帳で用いられたか。

縁起1　光明品略縁起　一巻　紙本墨書・巻子装

〔本紙〕縦三九・五cm×横一七六・三cm

〔裏書〕「光明品略縁起」（朱筆）

光明本尊について、大正十二（一九二三）年九月の出開帳にあたり作成された読み縁起。朱点があり、拝読用であることがわかる。

〔翻刻〕

此方ニ掛ケ奉ル大幅ハ・光明本ト申シ奉リ・祖師上人御真筆・本誓寺開基是信房・祖師上人ノ御名代ヲ蒙リ・奥州ヘ下リ・石ヶ森ト云フ処ニ一宇ヲ建立シ・御相伝ノ一流・浄土真宗ヲ弘メ玉フニ・日ニ増シ御法義御繁昌ナリシカバ・此義ヲ上人ヘ申上ゲントテ・ハル〳〵上京イタサレ・五条西ノ洞院・花園ノ御殿ニ於テ・上人ヘ御対顔申上ケ・出羽奥州・御法義御繁昌ノ由ヲ・委シク申上ラレケレバ・年来愚禿ガ恐願満足セリト・ノ玉ヘテ・御喜ノ余リ・弥陀釈迦二尊・三国伝来ノ・念仏ノ元祖等連師染筆遊サレ・是信房ニ下シ置レタル御霊宝本尊祖師上人御真筆七百有年ニナラセラレ・地合モ損シ・御絵相モ・分リ兼ネ・末世ノ御門下・永ク拝礼モオボツカナシ・之ニ依テ・南部領主様ヨリ・御写御願ノ処・格別ノ思召ヲ以テ・御絵相ハ・御絵所ヘ仰セ付ラレ・三名号ヲ初メ・菩薩人師等ノ御銘ハ・厳如上人御染筆ナレバ・本紙同様・大切ニ拝礼ヲ遂ラレヨ・・・

○南无不可思議光仏。・帰命尽十方无碍光如来。・南无阿弥陀仏・阿弥陀如来・釈迦如来・○此二尊ハ・十方衆生ノ・父母ニ喩ヘサセラレ・今度弥陀ノ浄土ニ・往生遂ゲ奉ルコトハ・此弥陀釈迦二尊ノ・発遣招喚ノ勅命ニ由テ・信心ノ正因ヲ得奉リ・浄土往生ヲ遂ゲ奉ル・故ニ・釈迦弥陀ハ・慈悲ノ父母・種々ニ善巧方便シ・吾等ガ无上ノ信心ヲ・発起セシメ玉ヘケリト・御和讃ニ仰セラレテアル・○此方ハ・大勢士菩薩・此方ハ・竜樹菩薩・此方ハ・天親菩薩・コノ三菩薩ハ・印度ノ国ニ御出世遊サレ・御念仏ヲ御勧メ下サレタル方々・○此方ハ・曇鸞大師、・慈愍三蔵・道綽禅師・善道大師・懐感禅師・少康法師・法照禅師・コノ御方々ハ志那ノ国ニ御生レナサレ・各々御宗旨ハ差ヘトモ・迷ノ凡夫ガ仏ニナル道ハ・弥陀ノ本願ニ限ルトアツテ・御念仏ヲ・御勧メ下サレタル方々・○此方ハ・和国ノ教主・聖徳太子・御身ハ摂政ノ位ニ在リ乍・（肉食妻帯ノ行状ヲ示シ）篤ク三宝ニ帰依シ・肉食妻帯シテ官服ニ袈裟ヲ掛ケサセラレ・僧ニ非ズ・俗ニ非ズトテ・吾御開山ノ・御行状ヲ・示サセラレテアル・即チ・コレ浄土ニマシマス観世音菩薩・末世ノ衆生ヲ助ケントテ・凡夫ノ塵ニ交リテノ・御化導・○コノ太子ノ左右ニマシマスハ・妹子ノ大臣・曽我ノ大臣・五徳博士・阿佐太子・日羅上人・恵慈法師・コノ一段ハ・太子ノ御看属ニシテ・儒仏神ノ三道・念仏ニ関スルトアル御相・○此方ハ・横川ノ源信和尚・御身ハ天台宗ニアリ乍ラ・往生要集ヲ作リ・地獄極楽ノ体相ヲ示シ・日本ニ於テ・初テ御会仏ヲ・御勧メ下サレタル御方・○此方ハ・念仏ノ元祖・黒谷ノ法然上人・（浄土宗御開基）吾御開山ノ御師匠・専修念仏ノ大道師・ソノ専修念仏ガ・仇トナリ・御身ハ土佐ノ国ニ御流罪

トナラセラレ・吾御開山ヲ初メ奉リ・御門侶三百八十余人・死罪流罪数ヲ知ズ・カヽル御命ガケノ御苦労ハ・コレ偏ニ私一人ヲ導テ・真実報土ノ往生ヲ遂ゲサセントノ・御慈悲ト頂カネバナラヌ・○此方ハ・安居院ノ聖覚法印○此方ハ坂東報恩寺ノ開基・廿四輩ノ第一薗性信御房○此方ハ・沙弥信海御房○此方ハ高田一身田ノ御門跡・真仏上人・廿四輩ノ第二薗・○此方ハ・南部本誓寺ノ開基・廿四輩ノ第十薗・是信御房・此是信御房ヘ・御休房ハ御真影ヲ初メ・此光明其外（拝ミ上ラル）数々ノ御霊宝・（コレ末世ノ吾等ヘノ御記念ト拝ネバナラヌ）○アナタハ・御開山・御銘ハ・釈ノ親鸞ト遊サレ・（是信房ニ御対座アラセラレ仰ラレテ宜ハク如是弥陀三国ノ祖）如是弥陀釈迦二尊ヲ初メトシテ・天竺唐ノ念仏相承ノ祖師方ヲ絵カセラレ・是信房ニ御対座アラセラレ・仰ラレヲ宜ハク・「三国ノ祖師・各氏一宗ヲ興行ス・愚禿スヽムル処・更ニ私ナシト・」アツテ祖師上人ノ御勧メハ・一字一点御私ナク・（一器ノ水ヲ一器ニ移ス□如ク増ズ減サス）仏菩薩・人師等ノ・経論釈ニ由テ・御弘メ遊サルヽガ・浄土真宗ケカト云フコトヲ・御明シナサレタル御絵相・テアルナレバ有難ク拝礼ヲ遂ラレヨ・爾レバ・上人ノ仰セシ・弥陀ノ本願誠ニオワシマサバ・釈尊ノ説教虚言アルベカラズ・仏説誠ニオワシマサバ・善導ノ御釈虚言シ（アル）玉フベカラズ・善導ノ御釈誠ナラバ・法然ノ仰空言ナランヤ・法然ノ仰虚言ナラズンバ・親鸞ノ申ス旨亦以テ（虚言）空シルベカラサルカト・如来ノ金言大師ノ御釈聖人ノ仰セ・一器ノ水ヲ一器ニ移スガ如ク増サズ減サヌ御化道ナレバ心丈夫ニ御念仏ヲ申サレヨ先

大正十二年九月気仙方面開扉ニ願テ記ス

縁起2　光明摂取本尊読縁起　一巻　紙本墨書・巻子装

〔本紙〕縦三九・三cm×横四八・六cm

〔端裏書〕「光明摂取」（朱書）

光明摂取本尊について、大正十二（一九二三）年九月に作成された読み縁起。朱点がある（拝読用）。末尾に「草記」とある。

〔翻刻〕

此方ニ掛ケ奉ルハ・光明摂取ノ本尊ト称シ奉ル・御本山三代目・覚如上人・奥州大網ノ御坊ニ御下向ノ砌リ・本誓寺二代目・能信房・善知識ノ（御下）奥州マデ御下向ト申スハ・誠ニ希ナルコトト存シ・（□）坊守ヲ召具シ・大網ノ御坊ヘ参詣御対顔申上ケ・私国元ハ・祖師上人御真弟・是信房ノ開基ニシテ・御相伝ノ一流・信心決定ノ御門下・日ニ増シ・夜ニ増シ・御繁昌ナルコトヲ申上ラレシカバ・覚如上人（□）御喜ノ余リ・常随給仕・仰付ラレ・坊守モ剃髪シテ・法名ヲ妙信ト賜フ・然ルニ・善知識ニ別レ奉ルコトヲ・深ク悲ミケレバ・此尊号ヲ画カセラレ・其元ニ・能信妙信・夫婦ノ姿ヲモ顕シ玉ヒ・仰セラレテノ玉ハク・汝等タトヘ・吾ニ別ルヽトモ・念仏信ズル行者ハ・光明摂取ノ身ニテ・常ニ如来ノ光明ノ中ニ住ム身ナレバ・必ズ歎クベカラズトテ・此尊像ヲ下サレテアル・依テ光明摂取ノ本尊ト申シ奉ル・　爾レ

バ・本願ヲ信ジ・念仏称ル行者ハ・昔ノ能信妙信バカリデハナイ・何如なる悪人女人デモ・光明ノ中ニ住ム身ナレバトアル故・娑婆ニ居ナガラ・如是・摂取ノ御利益ヲ蒙ルコトト存ジ・相唯々・拝礼ヲ遂ラレヨ・・・・

大正十二年九月草記

縁起3　名体不離縁起　一巻　紙本墨書・巻子装

〔本紙〕縦三九・六cm×横五一・三cm

〔端裏書〕「名体不離」（朱書）

名体不離本尊について、大正十二（一九二三）年九月に作成された読み縁起。朱点がある（拝読用）。末尾に「草記」とある。

〔翻刻〕

此方ニ掛奉ルハ・名体不離ノ本尊ト申奉（ル）リ・祖師上人関東御経回ノ砌リ・常陸ノ国稲田ノ御草庵ニ於テ聖人・本誓寺開基是信房ヲ・出羽奥州イソ松前教化御名代トシテ・（下向）下シ玉ヘシカ・其時御真影ト供ニ・御本尊ノ為ニトテ・御染筆ナン下サレタル尊像ナリ・然ルニ・御本紙ハ・既ニ七百有余年ニナラセラレ・地合モ損シ・御絵相モ分リ兼ネ・（ヌルニ依テ）末ノ世ノ御門下・拝礼モ・オボツカナシ・之ニ依テ・南部領主様ヨリ・御写御願ノ處・格別ノ思召ヲ以テ・弥陀ノ御絵相ハ・御絵所ヘ仰セ付ラレ・左右ノ六字ノ御名号ハ・无上覚院様・御染筆ナレバ・御本紙同様・大切ニ・拝礼ヲ遂ラレヨ…　拝ミ上ラル、仏体ノ左右ニ・六字ノ名号ヲ顕シ玉フハ・弥陀ハ名ヲ以テ・衆生ヲ摂取スルトアツテ・阿弥陀如来・法蔵菩薩ノトキ・五劫兆載永劫ノ御苦労・積功累徳ノ善根ヲ・此六字ノ名号ニ収メ□シ・信ノ一念ニ・令諸衆生・功徳成就ト・凡夫ニ回向シテ・助ケ玉フガ故ニ・弥陀ハ名ヲ以テ・衆生ヲ摂取スルト・仰セラレテアル・其名号ト云フハ・即チ此南无阿弥陀仏ノ名号・是又（コレ）・弥陀ノ（名ニ）仏体ニ相離レザルガ故ニ・名体不離（本尊）ト名ケ奉ル・今此義ヲ御絵相ニ顕シ・愚ナ凡夫ニ知ラセンガ為ニ・仏体左右ニ・六字ノ名号ヲ・御染筆遊サレタレバ・心ヲ止メテ・拝礼ヲ遂ラレヨ・・・・

大正十二年九月草記

＊以上の翻刻にあたっては、①朱点は「○」「・」で表記、②本文の改行は原則として追い込み、③塗抹部分も判読できる部分は、「（　）」で表記、④判読不明部分は「□」で表記、とした。

調査余滴

以上、今回は全三〇点の本誓寺史料を報告する。本誓寺にはまだこのほかにも掛軸・冊子・巻子・モノ類が所蔵されている。また、緒言でも示したように古文書約五〇〇点も現存しているが、これらの報告は次回とし、最後に調査余滴を記しておきたい。

本誓寺の歴史的実態の解明という課題は、関係史料の確認という基礎作業が始まったばかりである。光明本尊をはじめとする初期真宗法宝物

史料の優品が多数、所蔵されている一方で、寺史に直結する戦国時代の法宝物は現存では教如期のもの（9　七高僧像　裏書1・2・3）となる。蓮如筆名号等はあるが、後世の収集品かもしれず、寺史と関わる伝承も今のところ見出せない。この空白期をどのように考えるか、史料に基づく検討が必要である。

本誓寺は何度か火災に遭っているらしく、焼失した法宝物もあるとみられる。現本堂は明治三十（一八九八）年の火災後、大正十（一九二一）年の再建である。「棟梁　伊藤平左衛門」との記録がある。内陣には通例の掛軸装・絵像の親鸞影像ではなく、厨子内に木像の親鸞影像が安置されていて、親鸞自作と伝えられている（これを是信が授かり奥州まで来たという伝えがある）。向かって右余間にはもう一つ厨子があり、木像の聖徳太子孝養像が安置されている。いずれも通常は閉扉されている。向かって左余間には是信房信明影像が奉掛されている（14）。是信房の墓については本誓寺本堂裏に一基あり、彦部（紫波郡）から移転されたものという。なお、彦部にも是信房の墓が伝えられている。

今回報告しなかった掛軸・冊子類の中には法宝物出開帳等で用いられたとみられるものもあり、その中には大般若経切など中世史料も見出される。一方で、親鸞旧跡等にちなむモノも生み出され、残されているが、それほど多種多様ではない。

むしろ、光明品（光明本尊）、光明摂取本尊、名体不離本尊に関する縁起類が、江戸時代から明治・大正、そして現在に至るまで、無数に残されており、これら三点を中心とする法宝物出開帳が江戸時代後期以降、かなりの回数で行なわれていることがうかがえる。本山への出開帳許可上申関係史料なども多数ある。

本誓寺歴代系図や末寺帳（末寺は江戸時代、三十か寺以上に加え寺中も三か寺あった）、末寺所蔵法宝物記録等も残されており、これらの詳細な検討が重要な課題である。本誓寺の歴史はもちろん、東北地域全体の真宗史の解明が格段に進むことが期待される。

次回の特別報告〔二〕古文書編を期してひとまず擱筆する。

（＊文責　安藤　弥　＊編集協力　千枝大志　川口　淳）